

修 士 課 程

- 出願関係用紙（次の各用紙が綴じ込んでいることを確認してください）

A 票	入学志願票	B 票	受験票
C 票	写真票	D 票	受験料納付票
E 票	志願理由書	F 票	受験許可・就学承諾書
その他	入学受験料郵便振込用紙、出願用封筒		

- 入学資格審査用関係用紙

G 票	入学資格審査申請書	H 票	入学資格審査用志望理由書
I 票	入学資格審査用研究業績等一覧		

1. 建学の精神

学問を通じての人間形成

2. 建学の理念

1. 人間性豊かな医師及び看護職者の育成
2. 能力の啓発に重点を置く教育方針
3. 地域社会の医療センターとしての役割の遂行
4. 国際的交流に基づく医学・看護学研究

3. 教育理念

社会から信頼され、看護の質の向上並びに看護学とその学際的发展に寄与できる、高度な看護実践能力と研究的思考能力を備えた看護実践者、看護管理者、看護教育者・研究者を育成することを教育理念とする。

4. ディプロマ・ポリシー

修業年限以上在籍し、所定の単位を修得するとともに、以下の素養を身につけ修士論文審査と最終試験に合格した学生に学位を授与する。

1. 高い倫理観に基づいた看護行動をとることができ、複雑な倫理的課題に対応できる調整能力を有する。
2. 最新の知見と技術を有し、根拠に基づいた高度な看護実践力を有する。
3. 総合的に看護ケアをマネジメントし、保健医療福祉チームにおいては多職者との連携・協力を調整する管理能力を有する。
4. 看護職者及び関連する多職者の中で専門的役割を発揮し、教育的役割を担う指導能力を有する。
5. 看護現象を科学的に分析・評価し、創造的な実践を開発する研究能力を有する。

5. カリキュラム・ポリシー

1. 高度専門職業人としての看護実践者、看護管理者、看護教育・研究者を育成するために、共通科目、専門科目、研究科目を設定する。
2. 論文コースの共通科目は、専門科目の基盤となる、保健医療福祉の動向や統計、研究、倫理に関する科目を設置する。
3. 論文コースの専門科目は、看護学の基盤となる学識を養う基盤機能看護学と、科学的根拠に基づく看護実践に関する学識を養う実践看護学を設置する。
4. 論文コースは、研究テーマの焦点化から論文の完成と研究成果の発表までのプロセスを2段階に分けて、段階に応じた科目を設置する。
5. 専門看護師コースは、それぞれの資格認定に必要な科目を設置する。
6. 修士論文（論文コース）及び課題研究（専門看護師コース）は、複数指導教員体制で行う。
7. 長期履修制度及び昼夜開講講義、集中講義を導入し、社会人入学生の学修に柔軟に対応する。

6. アドミッション・ポリシー

1. 看護学の基礎的知識と総合的な学力及び主体的に学ぶ学修態度を有する人。
2. 看護学の発展に寄与し、保健・医療・福祉分野に貢献する人。
3. 将来にわたり自律し、看護専門職業人として成長する人。

【禁煙への取り組みについて】

獨協医科大学では、人々の健康を守る医療職者を育成する大学として、入学者は喫煙しないことを約束できる方とします。

7. 募集人員・出願資格

募 集 人 員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	修士課程	看護学専攻	10名

専攻分野

	論文コース	専門看護師コース
基盤・機能看護学	看護管理学 生体防御・感染看護学*1) 基礎看護学	生体防御・感染看護学*1)
実践看護学	女性健康看護学 小児看護学 慢性看護学 がん看護学 老年看護学 地域看護学 在宅看護学 精神看護学	慢性看護学 がん看護学 老年看護学 在宅看護学 精神看護学*2)

*1) 「生体防御・感染看護学」については、令和2年度の開講はありません。

*2) 専門看護師（CNS）コース「精神看護学」については、令和元年度に日本看護系大学協議会の高度実践看護師教育課程認定申請中です。

領域別担当教員

分野	領域	教員名	連絡先
基盤・機能看護学	看護管理学	山口 久美子	yama-k@dokkyomed.ac.jp
	基礎看護学	板倉 朋世	itakura@dokkyomed.ac.jp
実践看護学	女性健康看護学	島田 三恵子	shimadam@dokkyomed.ac.jp
	小児看護学	井上 ひとみ	hitomi-i@dokkyomed.ac.jp
	慢性看護学	鈴木 珠水	suzukita@dokkyomed.ac.jp
	がん看護学	藤野 彰子	fujino@dokkyomed.ac.jp
		小西 敏子	konishit@dokkyomed.ac.jp
	老年看護学	金子 昌子	s-kaneko@dokkyomed.ac.jp
	地域看護学	板垣 昭代	itagaki@dokkyomed.ac.jp
	在宅看護学	花里 陽子	y-hana@dokkyomed.ac.jp
	精神看護学	天賀谷 隆	amagaya@dokkyomed.ac.jp

科目構成 (論文コース)

科目 区 分	授業科目の名称	配当 年次	単 位 数			授業形態			
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 習	
共 通 科 目	保健医療福祉特論	1前	1			○			
	保健統計学	1前	2			○			
	看護研究Ⅰ(概論)	1前	2			○			
	看護研究Ⅱ(量的・質的研究)	1後	2			○			
	看護管理・政策論	1・2前		2		○			
	看護情報科学特論	1・2前		2		○			
	生命倫理	1・2前		1		○			
	看護倫理	1・2後		1		○			
	看護理論	1・2後		2		○			
	行動理論	1・2後		2		○			
	看護教育学	1・2前		2		○			
	コンサルテーション論	1後		2		○			
	フィジカルアセスメント	1前		2		○			
	臨床看護病態生理学	1前		2		○			
	臨床看護薬理学	1前		2		○			
	遺伝子診断と疾患の分子生物学	1後		1		○			
	国際医療保健論	1後		1		○			
	国際言語文化論入門（英語分野）	1後		1		○			
	小計（18科目）	—	7	23	0	—			
専 門 科 目	基 盤 ・ 機 能 看 護 学	基礎看護学特論	1・2前		2		○		
		看護管理学特論	1・2前		2		○		
		生体防御・感染看護学特論Ⅰ(感染看護)	1・2前		2		○		
		生体防御・感染看護学特論Ⅱ(生体防御機能)	1・2前		2		○		
		シミュレーション教育論	1・2後		2		○		
		基盤・機能看護学演習Ⅰ	1通		4			○	
		基盤・機能看護学演習Ⅱ	1通		4			○	
		小計（7科目）	—	0	18	0	—		
	実 践 看 護 学	女性健康看護学特論	1・2前		2		○		
		小児看護学特論	1・2前		2		○		
		慢性看護学特論Ⅰ(セルフケアの再獲得)	1・2前		2		○		
		慢性看護学特論Ⅱ(セルフマネジメント)	1・2前		2		○		
		がん看護学特論	1・2前		2		○		
		がん終末期看護特論	1・2前		2		○		
		老年看護学特論Ⅰ（老年病看護学）	1・2前		2		○		
		老年看護学特論Ⅱ（認知症高齢者看護）	1・2前		2		○		
		老年施設看護特論	1・2前		1		○		
		地域看護学特論	1・2前		2		○		
		在宅看護学特論	1・2前		2		○		
		精神看護学特論	1・2前		2		○		
		実践看護学演習Ⅰ	1通		4			○	
		実践看護学演習Ⅱ	1通		4			○	
		小計（14科目）	—	0	31	0	—		
	研 究 科 目	特別研究Ⅰ	1通	2				○	
		特別研究Ⅱ	2通	4				○	
		小計（2科目）	—	6	0	0	—		
合計（41科目）		—	13	72	0	—			

科目構成 (専門看護師コース)

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態		
			必修	選択	自由	講義	演習	実習
共通科目	看護教育学	1・2前		2		○		
	看護管理・政策論	1・2前		2		○		
	看護理論	1・2後		2		○		
	看護研究Ⅰ(概論)	1前		2		○		
	看護研究Ⅱ(量的・質的研究)	1後		2		○		
	コンサルテーション論	1後		2		○		
	看護倫理	1・2後		1		○		
	生命倫理	1・2前		1		○		
	国際医療保健論	1後			1	○		
	国際言語文化論入門(英語分野)	1後			1	○		
	臨床看護病態生理学	1前	2			○		
	フィジカルアセスメント	1前	2			○		
	臨床看護薬理学	1前	2			○		
	遺伝子診断と疾患の分子生物学	1後			1	○		
	保健医療福祉特論	1前			1	○		
	保健統計学	1前			2	○		
	看護情報科学特論	1・2前			2	○		
	行動理論	1・2後			2	○		
	小計(18科目)	—	6	14	10	—		
専門科目	基盤・機能看護学 生体防御・感染看護学	生体防御・感染看護学特論Ⅰ	1前	2		○		
		生体防御・感染看護学特論Ⅱ	1前	2		○		
		生体防御・感染看護学特論Ⅲ	1後	2		○		
		地域感染制御保健学特論	1後	2		○		
		感染看護管理学	1後	2		○		
		生体防御・感染看護学演習Ⅰ	1後	2			○	
		生体防御・感染看護学演習Ⅱ	2前	2			○	
		感染看護管理学臨地実習	1後	2				○
		感染症患者の看護臨地実習Ⅰ	1後	1				○
		感染症患者の看護臨地実習Ⅱ	2前	2				○
		感染症患者の看護臨地実習Ⅲ	2前	3				○
		感染看護国際実践フィールドワーク	1後	2				○
		地域感染制御保健学特論実習	2前	2				○
		小計(13科目)	—	0	26	0	—	
	実践看護学 慢性看護学	慢性看護学特論Ⅰ(慢性病者の行動理解)	1前	2		○		
		慢性看護学特論Ⅱ(慢性病者の査定)	1後	2		○		
		慢性看護学特論Ⅲ(慢性病者への支援技術)	1後	2		○		
		慢性看護学特論Ⅳ(慢性病者に関連する制度や体制)	1後	2		○		
		慢性看護学特論Ⅴ(慢性病者に関連する治療・療養環境整備)	1前	2		○		
		慢性看護学特論Ⅱ演習(慢性病者の査定)	1後	2			○	
		慢性看護学特論Ⅲ演習(慢性病者への支援技術)	1後	2			○	
		慢性看護学実習Ⅰ(専門看護師の役割理解)	1後	2				○
		慢性看護学実習Ⅱ(慢性期/外来)	2前	2				○
		慢性看護学実習Ⅲ(急性増悪期・回復期・終末期/病棟)	2前	4				○
		慢性看護学実習Ⅳ(予防期/地域)	2前	2				○

科目区分			授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態		
					必修	選択	自由	講義	演習	実習
専門科目	がん看護学	がん看護学特論Ⅰ（腫瘍病態学）	1前		2		○			
		がん看護学特論Ⅱ（がん看護理論）	1前		2		○			
		がん看護学特論Ⅲ（がん看護援助論）	1前		2		○			
		がん看護学特論Ⅳ（がん薬物療法看護）	1後		2		○			
		がん看護学特論Ⅴ（がん薬物療法看護方法論）	1後		2		○			
		がん看護学特論Ⅵ（緩和ケア）	1後		2		○			
		がん看護学特論Ⅵ演習（緩和ケア演習）	1後		2			○		
		がん看護学実習Ⅰ（診断と治療）	1後		2				○	
		がん看護学実習Ⅱ（高度実践・役割）	2前		4				○	
		がん看護学実習Ⅲ（緩和ケア）	2前		3				○	
		がん看護学実習Ⅳ（在宅緩和ケア）	2前		1				○	
	老年看護学	老年看護学特論Ⅰ（老年看護学の基盤）	1前		2		○			
		老年看護学特論Ⅱ（アセスメント・健康生活評価）	1前		2		○			
		老年看護学特論Ⅲ（老年病病態治療学）	1前		2		○			
		老年看護学特論Ⅳ（看護介入方法）	1後		2		○			
		老年看護学特論Ⅴ（保健医療福祉政策・サポートシステム）	1後		2		○			
		老年看護学演習Ⅰ（老年急性期看護）	1後		2			○		
		老年看護学演習Ⅱ（認知症高齢者看護）	1後		2			○		
		老年看護学実習Ⅰ（老年急性期高度実践看護・役割）	2前		6				○	
		老年看護学実習Ⅱ（認知症高齢者高度実践看護・役割）	2前		4				○	
	在宅看護学	在宅看護学特論Ⅰ（保健医療福祉制度とケアマネジメント）	1前		2		○			
		在宅看護学特論Ⅱ（在宅看護アセスメント）	1前		2		○			
		在宅看護学特論Ⅲ（在宅看護援助方法）	1前		2		○			
		在宅看護学特論Ⅳ（医療的ケア・終末期ケア）	1後		2		○			
		在宅看護学特論Ⅴ（訪問看護ステーション等の管理・運営）	1後		2		○			
		在宅看護学演習Ⅰ（医療的ケアに関する看護）	1通		2			○		
		在宅看護学演習Ⅱ（終末期ケアに関する看護）	1通		2			○		
		在宅看護学実習Ⅰ（退院支援・調整と在宅チーム医療）	2前		2				○	
		在宅看護学実習Ⅱ（専門看護師の機能と役割①）	2前		3				○	
		在宅看護学実習Ⅲ（専門看護師の機能と役割②）	2後		3				○	
		在宅看護学実習Ⅳ（訪問看護ステーション等の開設・管理・運営）	2後		2				○	
	小計（42科目）			—	0	96	0	—		
科学研究	課題研究		2通	2				○		
	小計（1科目）		—	2	0	0	—			
合計（74科目）				—	8	136	10	—		

出 願 資 格

本研究科の出願資格は次のいずれかに該当する者とします。

- 1) 大学を卒業した者又は令和 2 年 3 月卒業見込みの者
- 2) 大学評価・学位授与機構により学士の学位を授与された者又は令和 2 年 3 月までに授与見込みの者
- 3) 外国において、学校教育における 16 年の課程を修了した者
- 4) 外国の学校が行う通信教育をわが国において履修することにより当該外国の学校教育における 16 年の課程を修了した者
- 5) わが国において、外国の大学相当として指定した外国の学校の課程（文部科学大臣指定外国大学日本校）を修了した者
- 6) 外国の大学その他の外国の学校（その教育研究活動等の総合的な状況について、当該外国の政府又は関係機関の認証を受けた者による評価を受けたもの又はこれに準ずるものとして文部科学大臣が別に指定するものに限る）において、修業年限が 3 年以上である課程を修了すること（前二号の規定による課程を修了することを含む）により、学士の学位に相当する学位を授与された者
- 7) 文部科学大臣が指定した専修学校の専門課程を修了した者
- 8) 文部科学大臣の指定した者
- 9) 看護学研究科において、個別の入学資格審査により、大学を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、22 歳以上の者（P.9 参照）

8. 出願期間・出願手続

出 願 期 間

第 1 期 令和元年 9 月 13 日（金）～令和元年 9 月 27 日（金）

第 2 期 令和 2 年 1 月 6 日（月）～令和 2 年 1 月 20 日（月）

- （注） 1 郵送による場合は、本学所定の封筒を用い、「書留速達郵便」で、出願期間内必着となります。
- 2 直接持参による場合は、平日の午前 9 時から午後 4 時までに（土曜日、日曜日及び祝日を除く）本学大学院看護学研究科事務室に提出してください。

出 願 手 続

- 1 出願を希望する者は、「出願に必要な書類」を一括して提出してください。
- 2 出願前に必ず研究指導を受けたい教員と、研究・教育内容について、直接事前面接を受けてください。

出願に必要な書類		作成方法
A 票	入学志願票	本学所定の用紙を使用すること。 写真 2 枚（出願日前 3 ヶ月以内に撮影した上半身、正面、無帽のもの、縦 4cm×横 3cm、カラー写真）を入学志願票、写真票に貼付すること。 なお、2 枚とも同一写真としてください。
B 票	受験票	
C 票	写真票	
D 票	受験料納付票	受験料納付票に「振替払込受付証明書」原本又は「ご利用明細票（振替受付票）」（コピー）を貼付してください。
	成績証明書	出身大学長が作成し、厳封したもの。 なお、看護系の短期大学、専修学校等で看護師、保健師、助産師教育を受けた者は、当該校の成績証明書も提出すること。 出願資格 2) に該当し、科目等履修制度にて単位を修得した者は、当該校の成績証明書を提出すること。 ＊いずれの書類も出願前 6 ヶ月以内のものに限る。
	卒業（見込み）証明書	出身大学長が作成したもの。 なお、出願資格 2) に該当する者は、学位授与証明書を提出すること。 ただし、令和 2 年 3 月までに授与見込みの者については、学位授与申請受理証明書を提出のこと。また、入学後に学位授与証明書を提出すること。 ＊いずれの書類も出願前 6 ヶ月以内のものに限る。
	資格取得（見込み）証明書	看護師、保健師、助産師の免許の写しを提出すること。なお、看護師国家試験受験資格取得（見込み）証明書は、出身大学長が作成したもの。
E 票	志願理由書	本学所定の用紙を使用し、自筆により 800 字以内で記述すること。
	受験料	30,000 円 本学所定の振替払込書用紙を用い最寄の郵便局から払いこみ、郵便振替払込受付証明書を受験料納付票貼付欄に貼付のこと。
	外国人出願者	外国人出願者は、上記の出願書類のほかに、（財）日本国際教育支援協会が実施する「日本語能力試験（2 級以上）」の「認定結果及び成績に関する証明書」を提出すること。

- 注意：①出願書類等に不備がある場合受理しないことがあります。
- ②提出した書類および受験料は、いかなる場合でも返還いたしません。

出願を希望する者は、出願前に志望する領域の教員と面談を行う必要があります。特に専門看護師コースは、論文コースとは修了要件が異なり、取得単位数が40単位以上であるため、修学に専念することが望ましく、入学後の研究・教育活動についても、事前によく相談してください。

事前面接の連絡先：獨協医科大学大学院看護学研究科 事務室

E-mail：kangogakubu@dokkyomed.ac.jp

電 話：0282-87-2489（事務室直通）

お電話の際、志望領域、研究テーマが決まっているか否か、連絡先、事前面接の希望日等を伺います。その後、事務室より面接者、日時を連絡いたします。

入学資格審査

出願資格（P.7）の9）の入学資格審査を受ける条件は、次のいずれかに該当する者としてします。

- a) 大学に3年以上在学した者
- b) 査読のある学術雑誌へ掲載、または学会の発表経験を有する者
- c) 勤務先の所属長の推薦を受けることができる者

入学資格審査を希望する者は、事前に審査を行うので、次の書類を取り揃え、申請期間内に事務室まで持参または書留にて郵送してください。（郵送の場合は必着）

1) 提出期間

〈第1期〉 令和元年 8 月 22 日（木）～ 8 月 30 日（金）午後4時まで

〈第2期〉 令和元年 11 月 21 日（木）～ 11 月 29 日（金）午後4時まで

〈科目等履修生〉 令和2年 1 月 22 日（水）～ 1 月 29 日（水）午後4時まで

2) 提出書類

G 票	入学資格審査申請書
H 票	志望理由書（入学資格審査用）※自筆により800字以内で記述すること。
I 票	研究業績等調書（入学資格審査用）
	論文の別刷り 1部

3) 審査結果の通知

入学資格審査結果については、本人宛てに通知書を発送します。

〈第1期〉 令和元年 9 月 19 日（木）

〈第2期〉 令和元年 12 月 19 日（木）

〈科目等履修生〉 令和2年 2 月 20 日（木）

社会人選抜

P.8の提出書類のほかに、下記の書類も提出してください。

F 票	受験許可・就学承諾書	本学所定の用紙を使用し、勤務先の施設長が記入したもの。
-----	------------	-----------------------------

9. 選抜方法・試験期日・試験科目等

選 抜 方 法

入学者選抜では、筆記試験と面接及び出願書類により総合的に判定します。

試 験 期 日

区分	試 験 日
第 1 期	令和元年 10 月 5 日 (土)
第 2 期	令和 2 年 2 月 1 日 (土)

試験科目及び時間割

試験科目及び時間割

試験科目	英 語	専門科目	面 接
試験時間	9:30～10:30	10:50～11:50	12:30～

＊英語の試験については、辞書 1 冊持ち込み可（電子辞書は不可）

＜受験上の注意事項＞

- ①受験票は、試験当日必ず携帯し、忘れた場合には、その旨を受付に申し出て受験票の再発行を受けてください。また、受験票は、入学手続の際に必要となりますので、試験後も大切に保管してください。
- ②試験当日は、午前 9 時 10 分までに試験室に入室してください。また、試験開始後 20 分以上の遅刻者には入室を認めません。
- ③自分の受験番号と同番号の机上票の貼付された席につき、受験票を机上票の手前に置いてください。
- ④当日は、黒鉛筆又はシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削りを必ず持参してください。
- ⑤携帯電話や音の出る機器は、アラームの設定を解除し電源を切り、かばん等に入れてください。
- ⑥昼食等は、必要に応じ各自持参してください。

試 験 会 場

栃木県下都賀郡壬生町北小林 880 番地

獨協医科大学看護学部棟

※巻末の「試験場」を参照のこと。

10. 合格者の発表

発表日時

第1期 令和元年10月17日（木）午前10時

第2期 令和2年2月20日（木）午前10時

発表方法

第1期・第2期とも本学看護学部棟入口に掲示するとともに、本人宛通知します。
なお、本学大学院ホームページでも閲覧できます。

URL <http://www.dokkyomed.ac.jp/>

※掲示発表を正式とします。

電話での問い合わせには一切応じません。

11. 入学手続等

入学手続期間

区分	期 間
第1期	令和元年10月28日（月）～ 令和元年10月30日（水）
第2期	令和2年2月26日（水）～ 令和2年2月28日（金）

入学手続方法

合格者には、合格通知書と入学手続書類を願書に記載された合格通知書等の送り先に送付しますので、期間中に入学手続を完了してください。期日までに所定の手続を完了しない場合は、入学を辞退したものと扱います。

・持参による手続

受付時間：午前10時～午後4時

手続場所：栃木県下都賀郡壬生町北小林 880 番地

獨協医科大学大学院看護学研究科 事務室

・郵送による手続

「書留速達」で郵送してください。手続期間内必着とします。

送付先：〒321-0293

栃木県下都賀郡壬生町北小林 880 番地

獨協医科大学大学院看護学研究科 事務室

入学に必要な学費

入学金 200,000 円

授業料（年額） 600,000 円

合計 800,000 円

※入学手続完了後、令和2年3月31日（火）午後5時までに入学辞退を申し出た場合は、入学金を除く学費を返還します。なお、期限後の入学辞退は、理由の如何に関わらず既に納入した学費は一切返還いたしません。

12. 社会人の就学に関する配慮

大学院設置基準第14条による教育方法の特例

本研究科は、設置趣旨である現在医療機関等で働いている看護職者の資質向上に貢献する目的で社会人受け入れに対応しています。そのため、大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例を用いて、必要に応じ、夜間開講講義、集中講義を導入するとともに、長期履修制度を導入し在職のまま学ぶことができるよう配慮します。

【大学院設置基準第14条】

大学院の課程においては、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行うなどの適当な方法により教育を行うことができる。

長期履修学生制度について

職業を有している等の事情により、標準修業年限（2年）での修学が予め困難であることが見込まれる場合は、標準修業年限を超えて一定の期間（3年）までの、計画的な教育課程の履修を認めています。

長期履修学生制度を希望する場合は、事前に大学院看護学研究科事務室に相談してください。

13. その他

奨学金制度

学費支弁の困難な学生には、学業成績と経済的事情を考慮した奨学金制度があります。種類は次のとおりです。（選考あり）

（1）日本学生支援機構奨学金

・ 第一種奨学金（無利子）	50,000 円	88,000 円	
・ 第二種奨学金（有利子）	50,000 円	80,000 円	100,000 円
	130,000 円	150,000 円	

（2）獨協医科大学大学院奨学金

月額 100,000 円（無利子）

教育・研究費補助制度

教育・研究費について、毎年度、一部補助する制度があります。

個人情報の取り扱いについて

出願及び入学手続にあたって提出いただいた個人情報は、入学試験の実施・合格発表から入学手続及び入学後の修学指導・支援等、大学が必要と判断した事項を行うために利用します。これらの業務の一部を、獨協医科大学が指定した業者に委託することがあります。予めご了承ください。

14. 科目等履修生

看護学研究科の所定の授業科目のうち、一部の科目について履修することを志願する者は、選考のうえ、科目等履修生として入学することができます。（本募集要項 P.31～34 を参照）

獨協医科大学大学院

看護学研究科 事務室

〒321-0293

栃木県下都賀郡壬生町北小林 880 番地

電 話 0282(86)1111 (代表)

0282(87)2489 (事務室直通)

E-mail : kangogakubu@dokkyomed.ac.jp

<論文コース>

科 目 概 要		
科目区分	授業科目の名称	講 義 等 の 内 容
共通科目	保健医療福祉特論	本科目は、看護職者の役割を明確にするとともに、臨床および行政担当者から直接情報を得て実情を知り、看護職者として保健医療福祉に有効に機能するための基盤をつくることを目的とする。
	保健統計学	疫学は、「人間集団を対象として、その健康および健康障害の頻度と分布を明らかにし、それらに関連する要因とその交絡状況を包括的に研究して、より良い社会、暮らしに還元する学問」であり、統計学は、「多くのデータを要約し、中に含まれている情報を把握しやすくする手段であると同時に、要約された事実に基づいて、別の場面（対象）あるいは将来にどのような結果が得られるかを推定、あるいは予測する学問」である。したがって、疫学と統計学は、車の両輪のような関係であり、さまざまな研究においてはもちろん、日常の業務や生活においても重要な学問である。
	看護研究Ⅰ（概論）	本科目では、看護研究論文の作成に必要な基礎知識として、看護研究における研究の動向、研究の種類、研究デザイン、研究プロセス、研究課題の明確化、文献検討、データ収集、データ分析、研究計画書の作成方法、研究倫理と倫理審査申請書の作成方法、研究発表と討論、研究成果の活用などについて学修する。
	看護研究Ⅱ （量的・質的研究）	本科目では、看護研究Ⅰで学修した研究の基礎知識をふまえ、看護領域でよく用いられている研究方法として、量的研究では疫学的調査法、質的研究では内容分析、Grounded Theory Approach、解釈学的アプローチについて学び、各々の方法論の特徴と限界について理解する。
	看護管理・政策論	本科目では、保健医療福祉分野に従事する諸専門職との連携をとりながら、看護職者が仕事をしていくための看護管理に関する諸理論、概念について概観する。また、保健・医療・福祉施設における看護組織のあり方、看護職者の業務運営・管理のあり方、看護業務と政策との関連について学習し、質の高い看護を提供できるシステムを構築することについて学習する。
	看護情報科学特論	看護情報科学特論（Advanced Nursing Informatics）では、情報化社会の変革とともに変化を続ける医療・看護における情報化に関する内容について、概念とともに実践的な活用をするための知識や技能、さらには研究的な取り組みも含む将来的な展開について学ぶ。
	生命倫理	本科目では、生命倫理の基礎的、専門的知識を学修すると共に、現在議論されている生命倫理問題の動向と現状を理解して、医療場面での倫理的諸問題への応用倫理的なアプローチを試みることで、倫理的な判断能力、実践能力の向上を図ることを目的に学修する。
	看護倫理	近年、社会の人々の価値観が多様化し、医療への期待や権利意識が高まる一方で、急速に進展高度化する医療技術に伴うさまざまな新たな倫理的問題が生じている。これに対して、患者の擁護者である看護職は倫理的感受性と調整力が求められる。 本科目では、このような状況下において、看護職はどのように考え、判断、対応したらよいか、看護専門職に求められる倫理的問題への対応について探究することを目的とする。具体的には、倫理的問題への対応のために必要な基礎的知識について講義し、医療現場やライフサイクルで看護職が直面する葛藤やジレンマを感じる場面を取り上げ、検討する。
	看護理論	高度な実践能力を育成するにあたり、看護理論は「看護」という営みを理解し、新たな看護実践を創造する理論枠組として価値づけられる。 本科目では、代表的な「ドロセア・オレムのセルフケア理論」「ジーン・ワトソンのケアリング理論」「パトリシア・ベナーの看護理論」などについて論及し、理論の看護事象への活用法を示す。また、1つの理論について検討した結果をプレゼンテーションする。

共通科目	行動理論	行動の理論として、行動分析学という学問を紹介する。行動分析学は、実験的行動分析学と応用行動分析学からなる。実験的行動分析学は、行動の実験的基礎科学で、行動についての法則（行動の原理）を明らかにする学問である。実験的行動分析学によって明らかにされた「行動の原理」を基にして、私たちの行動を環境に適した方向に改変するための方法論が応用行動分析学である。その意味で、行動分析学の知見は、医療や看護、あるいは福祉に活かすことができる。 本科目では、基礎と応用の行動分析学を紹介しながら、どのようにすれば私たちの行動の問題（行動変容等）を解決していくことができるのかについて講義する。
	看護教育学	看護専門職としての教育的役割は、看護実践や後輩育成において重要不可欠である。 本科目では、教育の定義や本質、教育学における基本概念や理論を学ぶ。さらに、医学教育の現況を参考に、基礎教育、継続教育、卒後教育の関連およびこれらの現状と課題、看護管理における看護教育の位置づけを理解し、看護専門職業人としてのキャリア開発のあり方について探求する。
	コンサルテーション論	コンサルテーションの基本理論、プロセス、役割機能、ならびに看護学領域におけるコンサルテーションの実際を学ぶ。これらを通して、患者やその家族、看護職が抱える課題や問題解決のプロセスを共有し、有効な援助が行なわれる資源として活用されるコンサルタントの役割を理解する。 また、事例検討やロールプレイなどの学習方法を駆使して、患者や家族へのケアや組織的な課題を明確化し、具体的なケアに関する助言などのコンサルテーションのプロセスを学び、適切な援助ができることを目指す。そして看護におけるコンサルテーションに有用な対人関係スキルを学び、さまざまな健康問題において適確な判断、指導、対処ができる能力を習得する。
	フィジカルアセスメント	生理的および病態学的徴候に関する高度実践看護師の備えるべきフィジカルアセスメントの技能を効果的な学習法によって習得する。
	臨床看護病態生理学	病態生理学は人体の正常な機能が異常をきたしたり、調節機能が破綻することによる疾病のメカニズムと身体の状態を理解し、診断や治療に応用することを目的としている。 本科目では、正常な臓器や組織・細胞の機能をもとに、疾病の発症から進行あるいは回復、さらに治療による病像の推移などを理解する。また、地域や臨床で遭遇する頻度の高い疾患の病態生理の理解とエビデンスに基づいたアセスメント能力を高めることによって、高度な看護実践のための基盤を築く。
	臨床看護薬理学	薬物は、生物が本来有している生体機能を促進するかあるいは抑制するかである。これは、薬理学の基本的概念であり、薬物療法での「薬によって、回復力を促進する」ことに繋がる考え方である。 臨床看護薬理学では、体内薬物動態や病態生理に基づく薬物治療の科学的根拠および臨床応用について解説し、治療効果の評価や有害作用発現の機序についての理解を深める。 さらに、主要病態における薬物動態の変化を解説し、薬物反応の変化、薬物相互作用、薬物中毒などに関する理解を深め、薬物使用の判断やアドヒアランスの向上を図るためのより高い専門知識を学修する。
	遺伝子診断と疾患の分子生物学	医療従事者として種々の疾患の病理・病態を正確に捉えることは重要である。これらの疾患は近年の基礎・臨床医学の進歩により分子レベルで解明されるようになっており、病理・病態を分子レベルで理解することが肝要になっている。そこで本科目では、分子生物学の基礎知識を習得し、生体の構造や機能を規定している DNA に対する興味関心を養うとともに、疾患に関連した遺伝子の機能および遺伝子診断の原理や問題点について考究する。

共通科目		国際医療保健論	社会のグローバル化を背景として、災害や感染などの健康課題に関して国際的な対応が必要となる場面が増加している。本教科では特に国内外の自然災害や紛争、パンデミックな感染症発症の歴史的背景やWHOの機能と課題などの現実を学ぶ。授業の方法としては専門看護師として国際的にも役割機能を果たせる実践的な力を涵養するために、学生の討議形式による授業を展開する。
		国際言語文化論入門 (英語分野)	国際化が進む現代に於いて、国内における外国人患者のケアおよび海外での医療協力活動異文化コミュニケーションに必要ななど、医療従事者にも英語の運用力が求められている。本科目では、国際共通語である英語を駆使し、外国に対して日本人と同様に看護に必要なコミュニケーションが出来る事を目的とする。そのためには英語表現のみならず、主に英米文化圏と日本の国民性、文化の相違、異文化コミュニケーションにおける誤解例などを通して、多様な価値観を理解し、豊かな教養を身につけてもらいたい。
専門科目	基盤・機能看護学	基礎看護学特論	看護の質の向上には、エビデンスに基づいた質の高い看護ケアの実践が不可欠である。 本科目では、看護の基礎的概念や理論を理解し、それらの概念に基づいたさまざまな看護技術のエビデンスを検証するための方法論を学び、創造的で新たな技術開発の可能性について探求する。また、看護技術提供に潜む倫理的問題と配慮について考える。
		看護管理学特論	看護組織における看護サービスを質的に保証し、均質に提供するためには、看護業務の標準化を図り、変化する社会情勢や保健・医療・福祉における技術的変化や制度的変化に対応し、変革を繰り返し、継続的に業務の刷新を図る必要がある。 本科目では、組織が発展し機能するための看護マネジメントについて、看護管理の歴史的変遷と看護サービスに関連する保健医療制度、看護政策、マネジメントの概念や理論について学修し、マネジメント機能やマネジメント能力について探求する。
		生体防御・感染看護学 特論Ⅰ (感染看護)	本科目では、微生物学の基礎および感染のメカニズムに関する基礎知識を基に、医療関連感染（院内感染）の歴史的変遷と医療関連感染の基礎知識、今日的課題、その防御対策と今後の展望について学ぶ。また、個人への感染対策の基礎知識として、人々の生活範囲のグローバル化とライフスタイルの変化、高齢化などに伴って問題となってくる、自然免疫機能（生体防御機能）と感染防御について学ぶ。また、感染症の治療総論として、抗菌薬、化学療法、ワクチンなどに関する知識を習得し、実際に発生頻度の高い医療関連感染症の診断とそのための微生物学検査、治療、医療処置などについて学ぶ。
		生体防御・感染看護学 特論Ⅱ (生体防御機能)	21世紀は“感染症時代の再来”といわれるように、感染症は診療科や専門分野を問わず、医療従事者に共通した問題である。感染症患者に対する医療や院内感染対策などにおいて看護職の果たす役割は大きく、学術的基盤の理解は重要である。 本科目では、細菌、真菌、ウイルスといった病原微生物の生物学的特徴と感染経路、感染症の症候に関する基礎について学ぶ。また、感染症に対する生体防御反応（免疫）や免疫・抗菌薬療法の基礎を学び、感染症の診断、治療法の基礎についても理解する。
		シミュレーション 教育論	シミュレーション教育論では、おもにインストラクショナル・デザインの理論・モデルを用いて、看護基礎教育および看護職員研修を有益なものに改善するスキルについて演習を通じて修得する。
		基盤・機能看護学演習 Ⅰ	（概要）本科目は、看護実践事例を分析し、課題を見出し、その改善策を見出すまでに必要な一連の能力を身につけることを目的とする。具体的には、履修生個々が事例をプレゼンテーションし、グループ討論や指導教員よりの助言を得て学修を進める。
		基盤・機能看護学演習 Ⅱ	（概要）本科目は、内外の文献を批評的、構造的に解説するための基礎的な能力を養うことを目的とする。具体的には、学生が関心のある文献をプレゼンテーションし、グループ討論と指導者の助言をもとに学修を進める。
専門科目	実践看護学	女性健康看護学特論	リプロダクティブ・ヘルス/ライツの概念を理解し、性と生殖に関する女性の健康と人権について探求する。また、女性のQOLにおけるライフサイクル各期の健康支援にむけて、効果的な女性の健康支援と支援のために必要な能力、および看護専門職の役割について探求する。
		小児看護学特論	この科目では、子どもと家族の健康な成長・発達と健康及び健康障害を支援するために、子どもの人権擁護と生涯発達の視点に立ち、子どもの成長・発達、子どもと家族に関する基盤となる理論を学修する。また、子供と家族が生活している、自然環境、社会・文化的な環境とそれらの変化に応じて生じる健康課題を探求する。

専門科目	実践看護学	慢性看護学特論Ⅰ (セルフケアの再獲得)	Chronic Care に関する主な疾病の保健・医療の動向および医療対策、専門的看護実践の基礎となる対象理解、アセスメント、看護技術、支援システム、家族支援について理解し、その中でセルフケアの重要性と、支援の在り方を探求する。
		慢性看護学特論Ⅱ (セルフマネジメント)	Chronic illness の状態である個人とその家族の健康や生活に及ぼす影響と、それに対する個人の反応、療養行動特性の理解及び看護に有用な理論と概念について学修し、これらを踏まえセルフマネジメントの視点から対象者への援助方法について探求する。特に、セルフマネジメントが困難な“環境病”について理解し、外部の環境を完全にコントロールする困難さを知り、臨床環境医学、環境保健についての基礎的知識・現状・課題について学修する。
		がん看護学特論	がん治療（主に化学療法、放射線療法）を受けるがん患者および終末期にある患者とその家族への問題解決および満足感を高めるための理論や支援方法について、実証的に研究する方法ならびに実践に応用する方法を探究する。終末期看護領域においては、完成された先行論文を中心に、がん患者の終末期の生活上の問題を取り上げながら現状の看護支援方法の課題について検討する。化学療法、放射線療法看護領域においては、治療にともなう有害事象に関する課題を取り上げ、有害事象を緩和するための効果的な看護ケアシステムを探究する。
		がん終末期看護特論	がん終末期患者およびその家族の抱える苦痛や症状を緩和するために、緩和ケアにおける諸理論・諸概念と最近の研究動向を学び、患者と家族の QOL を高めていくための看護支援の方法論を探究する。具体的には、がん終末期患者と家族が抱えるトータルペインに対する苦痛緩和の技術、患者が満足感を抱きながら自分らしく生き抜くことができるための看護を探究する。さらに、ギアチェンジ期以降の患者が緩和ケアを受ける状況で、複雑で困難な問題を抱える患者と家族への支援方法、患者と家族の生きる希望を支え、QOL を維持・向上するための看護ならびに実践に応用する方法を探究する。これらを踏まえて、がん終末期看護の独自の役割を開拓していく能力を育成する。
		老年看護学特論Ⅰ (老年病看護学)	本科目では、入院治療を受ける老年者の加齢と疾病・治療による生体反応と身体・心理・社会的変化による生活反応を理解し、入院中に生じやすい、せん妄や寝たきり状態に陥退する肺炎、転倒骨折などの二次障害を予防し、回復を促進する急性期からのリハビリテーション看護アプローチについて探求する。また、老年患者が入院している病棟管理とスタッフ教育について考究する。
		老年看護学特論Ⅱ (認知症高齢者看護)	認知症は超高齢化社会であるわが国の大きな健康問題のひとつで、認知症の人と家族への支援方法の確立と普及、支援システムの確立が急がれている。本科目では、疾患としての認知症と認知症を病む人を、専門知識に加えて患者自身や家族の手記、ケア理論等を用いて広く理解を深める。また、その人を尊重した認知症高齢者と家族への支援について学修し、認知症を病む人と家族の支援についての課題を展望する。
		老年施設看護特論	我が国の保健医療福祉システムの中で、高齢者は健康問題によって自宅を離れざるを得なくなり、生活の場を変えながら最期の時を迎える者も増えている。高齢者の QOL を尊重した継続的な支援のために、看護職には生活の場のひとつである施設ケアの理解と、施設間あるいは他職種との連携・協働の能力が求められる。 本科目では長期ケア施設における看護、専門職種間連携についての理解と課題解決のための研究について文献の抄読、討議を通して学修する。
		地域看護学特論	地域住民全体あるいは特定集団を対象に、健康の維持増進、疾病予防、組織づくりに焦点をあてた公衆衛生看護活動に主眼をおき、授業を展開する。 具体的には、個人・家族、集団、地域全体を対象にしたヘルスケアニーズの分析・診断方法やケアシステムの構築を含む具体的な支援方法等、地域看護を構成する基本概念や理論を学修する。 また、それらの特徴的な活動方法・技術を明確にすることにより、地域で生活する人々の健康を守るためのしくみづくりにかかわる看護職の専門性について探求するとともに、実践活動の質の向上と、その活動を担う看護職の専門的能力の向上を図る。
		在宅看護学特論	在宅看護に関連する保健医療福祉制度を理解し、制度に基づく訪問看護サービスの提供や活用方法を理解し、看護専門職者に必要な知識を修得する。また、あらゆるライフステージにあり、多様な健康上の課題をもつ療養者と家族の生活の質向上にむけた在宅ケアチームにおける看護専門職の役割について探求する。

専門科目	実践看護学	精神看護学特論	精神保健医療における障がい者の生活に関連する事柄を専門的知識や理論を用いて総合的にアセスメントする。看護が障がい者の療養や在宅の生活に与える影響を理解し、問題解決に向けた適切な障がい者支援のための技能を習得することができるようにする。また精神保健医療の現状を踏まえ、精神保健医療施策や支援システムにおける看護の在り方を探求する。
		実践看護学演習Ⅰ	（概要）本科目は、看護実践事例を分析し、課題を見出し、その改善策を見出すまでに必要な一連の能力を身につけることを目的とする。具体的には、履修生個々が事例をプレゼンテーションし、グループ討論や指導教員よりの助言を得て学修を進める。
		実践看護学演習Ⅱ	（概要）本科目は、内外の文献を批評的、構造的に解読するための基礎的な能力を養うことを目的とする。具体的には、学生が関心のある文献をプレゼンテーションし、グループ討論と指導者の助言をもとに学修を進める。
研究科目		特別研究Ⅰ	（概要）特別研究は、修士論文を完成するまでのプロセスを２段階に分け、特別研究Ⅰ、Ⅱとして学修する科目である。 本科目は、１年次の通年科目であり、特別研究Ⅱに対して、研究の前半に位置づくものである。 本科目では、研究課題の焦点化から研究倫理審査申請書を提出するまでを内容とし、学修方法は、研究科で定めた研究計画に沿って行う。
		特別研究Ⅱ	（概要）本科目は、特別研究Ⅰに引き続き、２年次の通年科目であり、特別研究の後半として位置づくものである。 本科目の到達目標は、修士論文の完成とその発表までとする。その間の研究プロセスとしては、研究倫理委員会より承認が得られた段階から、研究計画書に沿って、計画した対象からデータを収集・分析し、これらをもとに研究論文の要件を充たすよう完成し、発表する。 「特別研究Ⅰ」及び「特別研究Ⅱ」の各担当教員の指導課題は次の通りである。 看護管理学：[山口久美子] 看護管理者が抱える現場のジレンマや看護管理上の問題に関することを研究課題とし、看護管理に関する研究指導を行う。 女性健康看護学：[島田三恵子] 女性の健康、および妊娠・出産・育児期の母子ケアを研究課題とし、母性看護および助産に関する研究指導を行う。 小児看護学：[井上ひとみ] 子どもと家族の看護（新生児・乳幼児の発達の援助、育児不安や児童虐待予防の看護、がんの子どもと家族の看護、子どもを亡くした家族のグリーフケアなど）を研究課題とし、子どもと家族の看護に関する研究指導を行う。 慢性看護学：[鈴木珠水] ライフスタイルやその人を取りまく環境についての課題、化学物質に敏感な方への予防に關しての支援およびセルフマネジメント、認知行動療法を用いた支援についての研究指導を行う。 がん看護学：[藤野彰子] がん患者の看護のうち緩和ケア、終末期看護を主に研究課題とし、がん看護に関する研究指導を行う。 老年看護学：[金子昌子] 高齢者の急性期からリハビリテーション、終末期にある高齢者の看護に関する研究及び看護基礎教育、継続教育、卒後教育など看護教育学に関する研究指導を行う。

研究 科 目	特別研究Ⅱ	地域看護学：〔板垣昭代〕 保健所や市町村等行政機関に所属する保健師の活動評価や地域における健康づくりのキーパーソンとしての保健師、養護教諭の専門性を課題として研究し、これらの課題に関する研究指導を行う。 在宅看護学：〔花里陽子〕 在宅療養者と家族のケアを研究課題とし、在宅終末期ケア、医療依存度の高い療養者の看護に関する研究指導を行う。 精神看護学：〔天賀谷隆〕 精神疾患を有する患者に対する看護、退院支援をするための専門職間の連携協働を研究課題とし、精神看護に関する研究指導を行う。 基礎看護学：〔板倉朋世〕 回復促進に繋がる快適な療養環境の創出を目指し、臭気に関する問題をテーマとする。療養環境の中で発生する様々な臭気の中で、排泄物臭や体臭の制御に関する手法の開発を研究課題とし、医療や福祉施設などの療養環境の「におい」に関する研究指導を行う。 がん看護学：〔小西敏子〕 がん患者の各病期において、特に終末期看護に関することを研究課題とし、研究指導を行う。
--------------	-------	--

＜専門看護師コース＞

科 目 概 要		
科目区分	授業科目の名称	講 義 等 の 内 容
共通科目	看護教育学	看護専門職にとっての教育的役割は、看護実践や後輩育成において重要不可欠である。 本科目では、教育の定義や本質、教育学における基本概念や理論を学ぶ。さらに、医学教育の現況を参考に、基礎教育、継続教育、卒後教育の関連およびこれらの現状と課題、看護管理における看護教育の位置づけを理解し、看護専門職業人としてのキャリア開発のあり方について探求する。
	看護管理・政策論	本科目では、保健医療福祉分野に従事する諸専門職との連携をとりながら、看護職者が仕事をしていくための看護管理に関する諸理論、概念について概観する。また、保健・医療・福祉施設における看護組織のあり方、看護職者の業務運営・管理のあり方、看護業務と政策との関連について学習し、質の高い看護を提供できるシステムを構築することについて学習する。
	看護理論	高度な実践能力を育成するにあたり、看護理論は「看護」という営みを理解し、新たな看護実践を創造する理論枠組として価値づけられる。 本科目では、代表的な「ドロセア・オレムのセルフケア理論」「ジーン・ワトソンのケアリング理論」「パトリシア・ベナーの看護理論」などについて論及し、理論の看護事象への活用法を示す。また、1つの理論について検討した結果をプレゼンテーションする。
	看護研究Ⅰ（概論）	本科目では、看護研究論文の作成に必要な基礎知識として、看護研究における研究の動向、研究の種類、研究デザイン、研究プロセス、研究課題の明確化、文献検討、データ収集、データ分析、研究計画書の作成方法、研究倫理と倫理審査申請書の作成方法、研究発表と討論、研究成果の活用などについて学修する。
	看護研究Ⅱ（量的・質的研究）	本科目では、看護研究Ⅰで学修した研究の基礎知識をふまえ、看護領域でよく用いられている研究方法として、量的研究では疫学的調査法、質的研究では内容分析、Grounded Theory Approach、解釈学的アプローチについて学び、各々の方法論の特徴と限界について理解する。
	コンサルテーション論	コンサルテーションの基本理論、プロセス、役割機能、ならびに看護学領域におけるコンサルテーションの実際を学ぶ。これらを通して、患者やその家族、看護職が抱える課題や問題解決のプロセスを共有し、有効な援助が行なわれる資源として活用されるコンサルタントの役割を理解する。 また、事例検討やロールプレイなどの学習方法を駆使して、患者や家族へのケアや組織的な課題を明確化し、具体的なケアに関する助言などのコンサルテーションのプロセスを学び、適切な援助ができることを目指す。そして看護におけるコンサルテーションに有用な対人関係スキルを学び、さまざまな健康問題において適確な判断、指導、対処ができる能力を習得する。
	看護倫理	近年、社会の人々の価値観が多様化し、医療への期待や権利意識が高まる一方で、急速に進展高度化する医療技術に伴うさまざまな新たな倫理的問題が生じている。これに対して、患者の擁護者である看護職は倫理的感受性と調整力が求められる。 本科目では、このような状況下において、看護職はどのように考え、判断、対応したらよいか、看護専門職に求められる倫理的問題への対応について探究することを目的とする。具体的には、倫理的問題への対応のために必要な基礎的知識について講義し、医療現場やライフサイクルで看護職が直面する葛藤やジレンマを感じる場面を取り上げ、検討する。
	生命倫理	本科目では、生命倫理の基礎的、専門的知識を学修すると共に、現在議論されている生命倫理問題の動向と現状を理解して、医療場面での倫理的諸問題への応用倫理的なアプローチを試みることで、倫理的な判断能力、実践能力の向上を図ることを目的に学修する。
	国際医療保健論	社会のグローバル化を背景として、災害や感染などの健康課題に関して国際的な対応が必要となる場面が増加している。本教科では特に国内外の自然災害や紛争、パンデミックな感染症発症の歴史的背景やWHOの機能と課題などの現実を学ぶ。授業の方法としては専門看護師として国際的にも役割機能を果たせる実践的な力を涵養するために、学生の討議形式による授業を展開する。

共通科目	国際言語文化論入門 (英語分野)	国際化が進む現代に於いて、国内における外国人患者のケアおよび海外での医療協力活動異文化コミュニケーションに必要ななど、医療従事者にも英語の運用力が求められている。本科目では、国際共通語である英語を駆使し、外国に対して日本人と同様に看護に必要なコミュニケーションが出来る事を目的とする。そのためには英語表現のみならず、主に英米文化圏と日本の国民性、文化の相違、異文化コミュニケーションにおける誤解例などを通して、多様な価値観を理解し、豊かな教養を身につけてもらいたい。
	臨床看護病態生理学	病態生理学は人体の正常な機能が異常をきたしたり、調節機能が破綻することによる疾病のメカニズムと身体の状態を理解し、診断や治療に応用することを目的としている。 本科目では、正常な臓器や組織・細胞の機能をもとに、疾病の発症から進行あるいは回復、さらに治療による病像の推移などを理解する。また、地域や臨床で遭遇する頻度の高い疾患の病態生理の理解とエビデンスに基づいたアセスメント能力を高めることによって、高度な看護実践のための基盤を築く。
	フィジカルアセスメント	生理的および病態学的徴候に関する高度実践看護師の備えるべきフィジカルアセスメントの技能を効果的な学習法によって習得する。
	臨床看護薬理学	薬物は、生物が本来有している生体機能を促進するかあるいは抑制するかである。これは、薬理学の基本的概念であり、薬物療法での「薬によって、回復力を促進する」ことに繋がる考え方である。 臨床看護薬理学では、体内薬物動態や病態生理に基づく薬物治療の科学的根拠および臨床応用について解説し、治療効果の評価や有害作用発現の機序についての理解を深める。 さらに、主要病態における薬物動態の変化を解説し、薬物反応の変化、薬物相互作用、薬物中毒などに関する理解を深め、薬物使用の判断やアドヒアランスの向上を図るためのより高い専門知識を学修する。
	遺伝子診断と疾患の分子生物学	医療従事者として種々の疾患の病理・病態を正確に捉えることは重要である。これらの疾患は近年の基礎・臨床医学の進歩により分子レベルで解明されるようになっており、病理・病態を分子レベルで理解することが肝要になっている。そこで本科目では、分子生物学の基礎知識を習得し、生体の構造や機能を規定している DNA に対する興味関心を養うとともに、疾患に関連した遺伝子の機能および遺伝子診断の原理や問題点について考究する。
	保健医療福祉特論	本科目は、看護職者の役割を明確にするとともに、臨床および行政担当者から直接情報を得て実情を知り、看護職者として保健医療福祉に有効に機能するための基盤をつくることを目的とする。
	保健統計学	疫学は、「人間集団を対象として、その健康および健康障害の頻度と分布を明らかにし、それらに関連する要因とその交絡状況を包括的に研究して、より良い社会、暮らしに還元する学問」であり、統計学は、「多くのデータを要約し、中に含まれている情報を把握しやすくする手段であると同時に、要約された事実に基づいて、別の場面(対象)あるいは将来にどのような結果が得られるかを推定、あるいは予測する学問」である。したがって、疫学と統計学は、車の両輪のような関係であり、さまざまな研究においてはもちろん、日常の業務や生活においても重要な学問である。
	看護情報科学特論	看護情報科学特論 (Advanced Nursing Informatics) では、情報化社会の変革とともに変化を続ける医療・看護における情報化に関する内容について、概念とともに実践的な活用をするための知識や技能、さらには研究的な取り組みも含む将来的な展開について学ぶ。
	行動理論	行動の理論として、行動分析学という学問を紹介する。行動分析学は、実験的行動分析学と応用行動分析学からなる。実験的行動分析学は、行動の実験的基礎科学で、行動についての法則(行動の原理)を明らかにする学問である。実験的行動分析学によって明らかにされた「行動の原理」を基にして、私たちの行動を環境に適した方向に改変するための方法論が応用行動分析学である。その意味で、行動分析学の知見は、医療や看護、あるいは福祉に活かすことができる。 本科目では、基礎と応用の行動分析学を紹介しながら、どのようにすれば私たちの行動の問題(行動変容等)を解決していくことができるのかについて講義する。

専門科目	基盤・機能看護学	生体防御・感染看護学 特論Ⅰ	21世紀は“感染症時代の再来”といわれるように、感染症は診療科や専門分野を問わず、医療従事者に共通した問題である。感染症患者に対する医療や院内感染対策などにおいて看護職の果たす役割は大きく、学術的基盤の理解は重要である。 本科目では、細菌、真菌、ウイルスといった病原微生物の生物学的特徴と感染経路、感染症の症候に関する基礎について学ぶ。また、感染症に対する生体防御反応（免疫）や免疫・抗菌薬療法の基礎を学び、感染症の診断、治療法の基礎についても理解する。
		生体防御・感染看護学 特論Ⅱ	本科目では、微生物学の基礎および感染のメカニズムに関する基礎知識を基に、医療関連感染（院内感染）の歴史的変遷と医療関連感染の基礎知識、今日的課題、その防御対策と今後の展望について学ぶ。また、個人への感染対策の基礎知識として、人々の生活範囲のグローバル化とライフスタイルの変化、高齢化などに伴って問題となってくる、自然免疫機能（生体防御機能）と感染防御について学ぶ。また、感染症の治療総論として、抗菌薬、化学療法、ワクチンなどに関する知識を習得し、実際に発生頻度の高い医療関連感染症の診断とそのための微生物学検査、治療、医療処置などについて学ぶ。
		生体防御・感染看護学 特論Ⅲ	本科目では、感染に対する生体防御の機能、易感染性と免疫抑制に関する基礎知識や最新の知見を基に、易感染宿主（immuno compromised host）、特にがんや骨髄移植患者などの免疫機能の破綻した患者、外科的侵襲を受けた患者、未熟児、新生児や高齢者に対する感染症の看護および、新興・再興感染症とその看護について学ぶ。さらに生体防御機能の賦活化に影響する諸因子の理解として色彩や色彩光、自然素材による居室内環境などのストレス緩和効果やリラックス効果について学ぶ。このことによって感染に対する生体防御機能の向上を図ろうという新しい視点に立った看護のアプローチを探る。
		地域感染制御保健学 特論	今後、地域には易感染性の高齢者や慢性疾患患者などの基礎疾患を持ちながら在宅療養や老健施設などに入居している感染ハイリスク患者、あるいは高度医療によって外来治療が可能になり、長期に医療監視が必要ながん患者や臓器移植や後天性免疫不全症候群などの免疫機能の脆弱性による感染ハイリスクの患者、さらには社会のグローバル化によって、インフルエンザや消化器感染症等に対する小児などの感受性宿主の増加が見込まれ、彼らに対する感染防御対策は重要な課題になってくると考えられる。そこで本科目は地域における感染症の課題や感染症の危機管理システム、感染症疫学、地域保健における感染予防のための啓蒙活動などについて学び、地域医療に貢献できる力を涵養する。
		感染看護管理学	医療関連感染の中でも特に医療の高度化や対象患者の高齢化、在宅看護への移行などに伴って今後も増加が予測される医原性感染として、各種医療器具類の生体内留置や組織の侵襲がある。これらによる感染の予防と治療処置や看護ケアなどの感染管理は療養生活上のQOLを高く保つためにも看護の重要な領域である。本科目では、医療デバイス関連感染の管理と熱傷や創傷管理について最新の情報を提供する。 また、広域感染の管理としては市井の流行感染として典型的な感染症のみならず、0157感染症、麻疹、SARS、新型インフルエンザ等のパンデミック、エンデミックな感染事例を通してアウトブレイクの制御、改善するための対策、監視システム、関連法規などについて考究する。
		生体防御・感染看護学 演習Ⅰ	本演習科目では感染管理の基本である手指衛生、環境衛生管理に必要な消毒法や無菌法を学ぶ。また、細菌やウイルス、プリオンなどの汚染物の消毒、滅菌の原理と方法について学ぶ。さらに感染症の診断技法として、検体採取とその取り扱い法、細菌学的診断法など病原微生物の特定に関する実習を行う。
		生体防御・感染看護学 演習Ⅱ	本科目では、まず、感染症看護の文献学習を踏まえ、感染対策としての感染防御機能のアセスメント技法、および感染防御機能の賦活化のための呼吸法や運動、臭覚・視覚刺激などによるストレス緩和やリラクゼーションなどの、多方面にわたるケア技法の演習などを行う。また、これらの学習を基礎として、学生は自らが想定した感染症患者の仮想対象に焦点を当てたケアモデルを構築し、スーパーバイズを受け、検討を重ねながら、生体防御の視点に基づいた感染看護法の開拓を体験学習する。感染看護の対象としては免疫の未熟・低下による易感染状態の患者、骨髄移植、化学療法、放射線療法などを受けている患者、および未熟児・新生児、高齢者などとする。

専門科目	基盤・機能看護学	感染看護管理学 臨地実習	獨協医科大学病院 ICT (Infection Control Team) の活動に参加し、病院施設における感染制御のシステムを実体験する。また、医療関連感染の制御に関わる様々な職種役割を理解し、チーム医療における感染専門看護師としての役割と技能を修得する。
		感染症患者の看護 臨地実習Ⅰ	専門看護師の臨床活動に同行しながら専門看護師の役割(実践・相談・調整・教育・研究・倫理)について学ぶ。
		感染症患者の看護 臨地実習Ⅱ	感染症患者の内、特に重篤で長期の経過をたどる HIV 感染患者、あるいは結核患者の入院加療中における看護の実践、退院指導、在宅療養に向けた各種関連領域へのコンサルテーション、経過のフォローアップと生活指導などについて臨地においてスーパーバイズを受けながら体験学習し、実習記録としてまとめる。
		感染症患者の看護 臨地実習Ⅲ	入院加療中の易感染患者の感染予防、および感染症患者の看護過程を臨地において長期追跡学習する。対象患者としては、開胸術後患者、血液疾患による骨髄移植患者、コントロール不良の糖尿病患者、未熟児、小児感染症患者、肺疾患・心臓疾患の高齢患者などとし、対象患者領域はその時点の病棟・病床条件と学生の学習課題に基づき、学生が主体的に選択する。 また、同時に専門看護師の役割機能の理解と効果的なチーム医療をコーディネートできる倫理観や行動規範を修得する。
		感染看護国際実践 フィールドワーク	グローバルな人々の交流はますます盛んになり世界が身近になる中、いまや他国で発生した感染症であっても無関係ではいられなくなっている。そこで、本科では発展途上国の衛生管理や感染防御の実態を体験学習することにより、感染症看護の原点を学ぶとともに、自然災害や紛争などにおいて、国際的な医療協力活動の要請に応じられる感染看護の技能と国際感覚を修得する。 実際的にはフィリピン大学公衆衛生学部および看護学部、JICA の活動地域などにおいて 1 週間 (5 日) の臨地実習を行う。ただし、海外実習における事前の準備として、フィリピンにおける医療・保健事情、JICA や WHO などの地域衛生や感染防御における連携活動の文献調査、および語学の訓練などの学習時間をカウントし、海外実習とのトータルな実習科目として感染看護国際実践フィールドワーク (2 単位) を設定する。
		地域感染制御保健学 特論実習	地域感染制御保健学特論の講義を踏まえ、地域住民に対する感染の流行をコントロールする仕組み(感染症の危機管理システム)、や地域保健における感染予防のための啓蒙活動の実際や感染の緊急対応や予防対策の実施場面を地域の保健師や地域看護の実践家とともに学ぶ。
専門科目	実践看護学	慢性看護学特論Ⅰ (慢性病者の行動理解)	慢性病者と慢性病に起因する障がい者(以下、慢性病者に含む)や家族が抱える慢性病特有の複雑で解決困難な問題および慢性病をもつ人の行動理解に役立つ病の軌跡、セルフケアとセルフマネジメント、障がい受容、自己効力感、エンパワーメント、スティグマとレジリエンスなどの諸理論を学修する。
		慢性看護学特論Ⅱ (慢性病者の査定)	慢性病者と慢性病に起因する障がい者(以下、慢性病者に含む)の包括的査定方法について講義を通して学修する。 具体的には、履修生のサブスペシャリティに応じて、糖尿病または脳卒中のいずれかを選択して、これらの疾患をもつ慢性病者に特化した身体心理社会的アセスメントを学修するほか、慢性病者に共通する SF36、自尊感情、ローカスオブコントロール、不安尺度、うつ状態自己評価尺度、家族などの心理社会生活面のアセスメントについて学ぶ。慢性看護学特論Ⅰで学んだ病みの軌跡をもとに、病体験によるアセスメントに上述した医学、心理学、社会学などの学際的な知識を取り入れ、病者を主観的、客観的または量的(程度)に捉え、多角的、科学的かつ包括的なアセスメントについて学修する。
		慢性看護学特論Ⅲ (慢性病者への支援技術)	慢性病者と慢性病に起因する障がい者(以下、慢性病者に含む)の状態の変化に対応した慢性病の予防・診断・治療に伴う専門的看護支援、自己管理支援、リハビリテーション看護、ターミナルケアなどに関する理論と支援技術について講義を通して学修する。 具体的には、まず、履修者のサブスペシャリティによって、糖尿病をもつ慢性病者または脳卒中をもつ慢性病者に特化した支援に必要な理論を学修する。その後、慢性病患者の支援に共通して必要な理論として、行動分析理論の援用、自己決定への支援、成人教育などを学修する。

専門科目	実践看護学	慢性看護学特論Ⅳ (慢性病者に関連する 制度や体制)	慢性病者と慢性病に起因する障がい者(以下、慢性病者を含む)に適用される医療・福祉の制度や体制について学修する。 具体的には、慢性病者に関連する国内外の制度と体制(診療報酬、保健医療制度・体制、職種間の連携)の現状と課題を把握した上で、慢性病者の自己実現、安寧な死、QOLの向上の観点から、今後のあり方について検討する。
		慢性看護学特論Ⅴ (慢性病者に関連する 治療・療養環境整備)	慢性病者と慢性病に起因する障がい者(以下、慢性病者を含む)の治療や療養環境および地域支援などを、質の高い生活に向けて調整する方策について学修する。 具体的には、人的資源としてのソーシャルサポート、セルフヘルプグループ、また、発病・急性増悪期、慢性期、回復期、終末期の療養環境、さらに、地域における支援の現状と課題を把握した上で、慢性病者の自己実現、安寧な死、QOLの向上の観点から、今後のあり方について検討する。
		慢性看護学特論Ⅱ演習 (慢性病者の査定)	慢性病者と慢性病に起因する障がい者(以下、慢性病者を含む)の包括的査定方法について演習を通して学修する。 具体的には、「慢性看護学特論Ⅱ」で学修した糖尿病、脳卒中を発症した慢性病者に特化した査定に必要な知識に加え、本科目では技術を学修し、知識と技術の統合を図る。また、履修生のサブスペシャリティー領域の慢性疾患患者の病体験をもとにした病期に応じた医学的診断技術、SF36、自尊感情、ローカスオブコントロール、不安尺度、うつ状態自己評価尺度などの心理社会生活面の査定ツールについて、事例を通して活用方法を学修した上で、履修生のサブスペシャリティー領域の慢性疾患患者の査定に最適な多角的、科学的、包括的な査定フォーマットを作成する。
		慢性看護学特論Ⅲ演習 (慢性病者への 支援技術)	慢性病者と慢性病に起因する障がい者(以下、慢性病者を含む)の変化する時期に対応した専門的看護支援、自己管理支援、リハビリテーション看護、ターミナルケアなどに関する理論と支援技術について演習を通して深める。 具体的には、「慢性看護学特論Ⅲ」で学修した糖尿病、脳卒中を発症した慢性病者の治療とその看護知識を基盤として、慢性病の病期に応じて使用される行動分析理論、自己決定への支援、成人教育などの専門的看護支援について演習を通して深める。また、履修者のサブスペシャリティー領域の慢性病患者に対する高度な看護支援について、事例検討、文献検討、関連学会へ参加し、得られた新たな知見を2つ取り上げ、「研究発表の概要、関心をもった理由、その支援が有効な慢性病者の病期、状態についての考察」をレポートにまとめることや、「履修生のサブスペシャリティー領域の支援技術に関する最近の研究の動向と課題」について討議することも学習方法として含める。
		慢性看護学実習Ⅰ (専門看護師の 役割理解)	本科目は、専門看護師の6つの役割(実践、教育、相談、調整、倫理、研究)を理解し、自己の専門看護師像を描き、取り組むべき課題を見出すために、専門看護師の活動に同行し、シャドーイングを通して学修する。
		慢性看護学実習Ⅱ (慢性期/外来)	本科目は、慢性期を維持するため、外来において、慢性病者(以下、患者と称す)を身体、心理、社会的側面から把握し、アセスメントにより医学的問題、看護問題を明確にし、慢性期を維持して患者と家族が住み慣れた場所で望む生活を過ごせるように多職種と協働し、セルフケアの調整・再獲得を支援する看護、及び医師の包括指示のもとで一部の治療を含む高度な看護を実践する能力を培うものである。
		慢性看護学実習Ⅲ (急性増悪期・回復期・ 終末期/病棟)	本科目では、複雑で解決困難な問題を抱える急性増悪期、回復期、終末期にある慢性病者とその家族に対して、セルフケアの調整・再獲得または安寧な死を迎えることができるように、病状の経過及び医学的治療に関するアセスメント、看護問題の適切な把握と根拠にもとづく支援方法を用いて、治療を含む看護計画を立案し、医師、看護師、多職種と協働して、患者の看護問題を解決するための質の高い看護実践能力を学修する。
		慢性看護学実習Ⅳ (予防期/地域)	本科目では、地域住民の健康に対する意識とセルフケア行動を理解し、慢性病を予防し、健康の保持・増進をはかるための質の高い看護実践能力を養う。 行政及び民間(職場(企業)、総合スポーツクラブ)による健康増進、生活習慣病予防活動への参加、総合スポーツクラブを利用する成人期または老年期にある対象へインタビューを行い、慢性病の予防のための意識、セルフケア行動を理解し、看護の役割を検討する。総合スポーツクラブを利用する地域住民のヘルスニーズにもとづき、支持・教育的な看護実践として健康教育を行い、地域住民のセルフケア能力を高める。 これらの実習を通して、地域に居住する住民を対象に、慢性病予防のための健康増進に関する実態を知り、看護の役割を探究する。

専門科目	実践看護学	がん看護学特論Ⅰ (腫瘍病態学)	腫瘍の定義と分類、腫瘍の診断、腫瘍の分化度や腫瘍の増殖および浸潤・転移など腫瘍の生物学的および臨床的特徴、発癌のメカニズムと癌遺伝子の役割および多段階的発癌のしくみ、腫瘍の疫学、発がんの危険因子、腫瘍の病態と予後および治療など、ヒト腫瘍学の病態全般について教授する。また、がん看護において最新の知見を踏まえて、専門技術を実践していくための基礎となる最新の治療、腫瘍精神学、家族性がんについて教授する。
		がん看護学特論Ⅱ (がん看護理論)	がん看護・緩和ケアに関連するパラダイムや主要理論、がん患者および苦痛を体験している人々の家族を全人的に理解する上で基盤となる概念・主要理論について探求する。また、それらの実践および研究への適用について検討する。
		がん看護学特論Ⅲ (がん看護援助論)	がん看護専門看護師として、患者と家族への実際の看護援助方法を教授する。特に複雑な問題を抱えた患者とその家族への看護支援について、文献により新しい知見を見出し、自らの体験について理論を活用して分析する。がん患者の意思決定のための理論について学修し、倫理的な問題を考慮した意思決定を支える看護支援について考察する。がん治療に伴う生体反応、侵襲について、オンコロジーエマージェンシーの特徴と看護援助について教授する。がんサバイバーの身体的、心理的、社会的、霊的な側面について教授し、特に遺伝、予防の観点からがんサバイバーを支える方略について学修する。
		がん看護学特論Ⅳ (がん薬物療法看護)	がんに対する集学的治療とがん薬物療法の近年の動向などを教授し、チーム医療における看護師の役割と機能を理解する。次に、がん薬物療法看護を実践する上で基盤となる、抗がん薬の基本原則、分子標的薬の特徴、薬物動態、副作用対策と支持療法について教授する。また、薬物療法の治療計画について、特に、計画立案のために必要な情報とその解釈、代表的ながんに対する標準的治療を教授する。最後に、がん薬物療法を受けている患者の緩和ケア、精神症状に対するケア、代替補完療法について教授し、がん薬物療法を受けている患者および家族の苦痛を緩和し、質の高い療養生活を送ることができるようなケアを探求する。
		がん看護学特論Ⅴ (がん薬物療法看護方法論)	がん薬物療法を受ける患者に対する投与管理の実践について教授する。また、がん薬物療法の有害事象の症状マネジメントについて、アセスメントする能力を養う視点を教授し、がん患者および家族の苦痛を緩和し、質の高い療養生活を送ることができるようなケアを探求する。次に、がん薬物療法におけるセクシャリティの問題と課題、外来において化学療法を継続するための患者教育やセルフケア支援について教授する。更に、成人に対する学習理論について教授し、がん薬物療法を受けている患者に対する教育支援およびがん患者のセルフケア支援のための教育方法について探求する。
		がん看護学特論Ⅵ (緩和ケア)	緩和ケア領域において、高度看護実践者として役割機能を発揮する能力を育成する。緩和ケア領域におけるがん看護専門看護師の役割と機能について教授するとともに、がん患者とその家族が体験する全人的苦痛および緩和ケアにおける死生観、死の準備教育におけるがん看護専門看護師の役割を検討する。また、療養の場の違いから見た緩和ケアの課題と対策を教授し、緩和ケアの質の向上を図るために、がん看護専門看護師の役割機能をどのように発揮するかを検討する。最後に、がん患者の精神的苦悩と苦悩に対する看護介入およびエンド・オブ・ライフケア、家族のグリーフケアについて、カウンセリング理論とそれを基盤にした実際を教授する。
		がん看護学特論Ⅵ演習 (緩和ケア演習)	がん患者および家族に対する看護に活用できるアセスメントの実際について学修するとともに、がん患者および家族に関わるケアマネジメントの理論と実践について探求する。次に、症状マネジメントモデルを教授し、それを基盤にした事例分析の方法を学修する。また、がんがもたらす苦痛症状を包括的に理解し、患者のセルフケアを高めながら症状を緩和するケアを、エビデンスにもとづいて提供する能力を育成する。地域で暮らすがん患者と家族の支援についても教授する。最後に、がん看護専門看護師としての機能である倫理問題、コンサルテーション、調整について、事例の分析を通してその方策を学修する。
		がん看護学実習Ⅰ (診断と治療)	がん診療の場において、状態の改善および維持のために治療を受けるがん患者を身体的、心理的、社会的、霊的側面からアセスメントし、医学的問題を明確にする。ケアとキューアを統合し、患者に必要な看護支援を提供する能力を養う。あらゆる治療、状況、場面において、患者の苦痛緩和のための身体的管理方法と治療を遂行するために必要な医師と協働する医療処置について、卓越した判断能力や直接ケア能力を養う。

専門科目	実践看護学	がん看護学実習Ⅱ (高度実践・役割)	がん看護専門看護師の指導のもとで、実際に行われている臨床での活動（実践、相談、調整、倫理調整、教育、研究）を学ぶ。また、包括的なアセスメントに基づき、複雑で対応が困難ながん患者とその家族に対して、苦痛の緩和、日常生活の回復・適応を促進するために、理論を活用しながら高度看護実践を行う。
		がん看護学実習Ⅲ (緩和ケア)	緩和ケアを受ける複雑で対応の困難ながん患者および家族に対して、薬物療法や理論を用いた苦痛緩和のための高度な看護を実践する。また、緩和ケア病棟から在宅への移行に際して必要とされる看護支援について理解し、地域の看護スタッフと協働して実践する。がん医療における地域連携を理解し、必要なシステムやがん看護専門看護師に求められている役割を見いだす。
		がん看護学実習Ⅳ (在宅緩和ケア)	在宅において終末期を迎え、緩和ケアを受ける複雑で対応の困難ながん患者とその家族に対して、苦痛緩和と QOL を高める看護支援について理解し、必要な支援を在宅ホスピス医および地域の看護スタッフと協働して実践する。終末期医療・在宅医療における地域連携を理解し、必要なシステムやがん看護専門看護師に求められている役割を見いだす。
		老年看護学特論Ⅰ (老年看護学の基盤)	老年者の健康と生活を理解するために有用な看護理論・概念を、文献等を活用し学修を深め、老年者が健やかに老いることについて多面的に理解する力を養う。また老年者に対する社会的理解と偏見を含め、老年者がおかれている状況と倫理的課題に対する解決方法を探究する。さらに国際的な視野をもって老年看護の課題と解決策について探究し、健康生活及び人生を完結する老年者に対する看護の専門的役割を考察する。
		老年看護学特論Ⅱ (アセスメント・健康生活評価)	老年者の健康生活の科学的なアセスメントと実践の評価に必要な知識と知識の活用について学修する。加齢の影響を考慮した身体機能のアセスメント、また老年者に多い全身症状のアセスメントの実際を学び、心身機能の正常からの逸脱と脆弱化の悪循環を予測できるアセスメント能力を養う。また、認知的、心理的、社会的側面のアセスメントについて学び、老年者の健康生活を、生活機能を含めて包括的に評価できる能力を養う。
		老年看護学特論Ⅲ (老年病病態治療学)	老年期に多い疾患、徴候、症状や複数の疾患に加齢が加わる複雑な病態について理解を深め、複雑でハイリスク状態にある老年者の健康問題を分析し、看護の必要性を判断するアセスメント能力を養う。また老年者の生体情報の解釈の仕方や、薬物療法など治療の特徴と管理について理解を深め、老年医療の現状と課題、看護の専門的役割について考察する。
		老年看護学特論Ⅳ (看護介入方法)	加齢や健康障害によって生じやすい症状や徴候及び症状や徴候の生活への影響を理解し、療養環境を整えリスクを最小限にする予防的ケアについて探究する。また、健康レベル、生活の場にかかわらず安全と安楽・安心を提供でき生活の質を保証する看護介入と、老年者の強みを引き出す看護介入方法について探究する。
		老年看護学特論Ⅴ (保健医療福祉政策・サポートシステム)	老年者の保健・医療・福祉政策を含むサポートシステムの現状と課題について学修し、老年者のサポートシステムの構築を図るために、現状を分析、課題の発見、多職者間の連携を図り問題解決に取り組む、協調的課題解決能力を養う。また、老年者の個々の状況をとらえ、個人に適したサービスを選択し、継続して看護サービスを提供するシステム構築のプロセスを学修する。また老年者を取りまく保健・医療・福祉体制の現状を分析し、よりよい老年者の健康生活の実現にむけた課題を提言できる能力を養う。
		老年看護学演習Ⅰ (老年急性期看護)	急性期医療を受ける複雑な健康障害をもつ老年者及び家族について理解を深め、複雑な看護問題を分析する視点と看護介入について探究する。さらに具体的な事例を通して、倫理上の課題や急性期医療に伴う看護上の課題を解決するための方法を学ぶ。さらに高度看護専門職者としての役割について探究する。特に治療環境下における輸液や鎮静剤の適性投与を、老年者の Q O L の視点からとらえ、治療過程におけるケアとケアの統合を図る、老年看護実践について探究する。
		老年看護学演習Ⅱ (認知症高齢者看護)	複雑で困難な課題を抱える認知症高齢者への高度な看護実践能力を養うために認知症の人の体験、援助理論と具体的な援助方法、倫理的課題について学修する。文献とフィールドワークから認知症高齢者と家族の体験を理解し、その人らしい生活を実現するために重要なケア関係とコミュニケーション能力を養い、その人を尊重した看護実践の課題と、認知症看護における専門看護師の役割について考察を深める。

専門科目	実践看護学	老年看護学実習Ⅰ (老年急性期高度実践看護・役割)	専門分野の講義及び演習での学修を発展、統合させて、急性期医療を必要とする複雑な看護問題をもつ老年者と家族を受け持ち、演習で探究した急性期老年者の看護を実践、評価する。看護実践を通して老年者と家族に対する、キューアとケアを統合した安全、安楽、安心で老年者の強みを引き出す看護実践を探究し、統一した看護ケアを提供するための教育及び多職者と協働を図り協調的問題解決を図るための相談・調整能力を修得する。 また老年者及び家族の意思決定を支え QOL を高めるための支援、倫理的課題への対応について探究する能力を修得する。さらに専門看護師との協働を通して自己の課題を明確し、専門看護師の役割と自律的活動について探究する。
		老年看護学実習Ⅱ (認知症高齢者高度実践看護・役割)	本実習では、施設で生活する認知症高齢者への高度な実践能力を養うことを目的とする。認知症外来実習では診断、治療を受ける認知症高齢者と家族への支援、在宅認知症高齢者と家族が生活を再構築し在宅生活を継続するための支援の実践を学び、既習の特論・演習での学修を統合して認知症高齢者と家族が迎える療養生活の軌跡を理解し、施設での療養支援および施設から在宅へ生活の場の移行への支援に必要なケア対象者の理解を深める。 認知症専門病院実習では、複雑で困難な課題をもつ認知症高齢者を受け持ち、受け持ち認知症高齢者と家族への実践を通して、認知症高齢者への高度なアセスメント能力と認知症高齢者の意思を尊重した実践能力およびケア提供者の倫理的ジレンマに気づき倫理調整を行う能力を養う。また、認知症ケアの質の向上に向けた、看護師間や多職種との調整、教育、相談能力を養う。
		在宅看護学特論Ⅰ (保健医療福祉制度とケアマネジメント)	わが国の在宅看護の歴史を学び、諸外国の在宅看護との比較の中でその特性を理解する。同時に制度の活用や関係機関・職種のネットワークの構築、退院支援・調整による在宅移行の可能性を検討するケアマネジメントの過程について修得する。
		在宅看護学特論Ⅱ (在宅看護アセスメント)	療養者・家族の健康と生活に活用できる理論やモデルを応用して、在宅看護におけるフィジカルアセスメント、家族アセスメント、生活環境アセスメント、セルフケアアセスメントの実践について修得する。また、在宅療養者・家族に関わるケアマネジメントの理論と実践について探求する。
		在宅看護学特論Ⅲ (在宅看護援助方法)	在宅療養者の看護計画の立案と実践・評価を含めた在宅看護過程を展開する。複雑で多様な課題を持つ療養者やケア提供者について、在宅療養者の健康と生活に活用できる理論やモデルを応用して、家族、セルフケア、生活環境をアセスメントし、倫理的・臨床的判断を総合して、問題解決方法を提案する。
		在宅看護学特論Ⅳ (医療的ケア・終末期ケア)	医療処置の必要な対象には医療機関の包括的支援を基盤として、検査、処置、対症療法、薬物調整などについて、アセスメントを実施し、看護を実践できる在宅人工呼吸器療法などに関わる医療機器の操作と管理方法、在宅緩和ケアのためのペインコントロールと在宅で終末期を迎える対象の看護等について学ぶ。
		在宅看護学特論Ⅴ (訪問看護ステーション等の管理・運営)	在宅ケア事業所の開設、効果的な管理・運営についての具体的方策および経営戦略について探求する。在宅ケアの質の評価のための方法の検討、改善策について検討する。
		在宅看護学演習Ⅰ (医療的ケアに関する看護)	在宅神経難病事例を用いた演習を主体とする。呼吸、栄養、排泄、コミュニケーション等の身体機能の低下を、医療機器を活用して生きる事例を通して、疾病の受容と療養方針の決定の支援、医療機関から在宅への移行期の支援、在宅療養開始時の支援、継続期の支援等療養者・家族への支援を検討する。
		在宅看護学演習Ⅱ (終末期ケアに関する看護)	在宅終末期ケアの実践事例を用いた演習を主体とする。終末期を自宅で迎えるため本人と家族の意思決定、在宅での療養環境の準備、療養者と家族をサポートするメンバーの確保と協働体制の確立、対象の QOL の追求、緩和ケアの実践、臨終期のケア、グリーフケアまでの各期の的確なニーズの把握とケア実施の方法を検討する。
		在宅看護学実習Ⅰ (退院支援・調整と在宅チーム医療)	この実習では、在宅看護実践の開始前に関わる医療機関の退院支援・調整部門で実習する。これにより、在宅看護を必要とする療養者・家族への支援を系統的、包括的にとらえるための視点を養う。尚、本実習では、CNS が備えるべき 6 つの能力のうち、他職種との「連携調整」を中心に「相談」・「倫理的問題の調整」等の分野について学習する。

専門科目	実践看護学	在宅看護学実習Ⅱ (専門看護師の機能と役割①)	医療的ケアを要する事例を1例以上受け持ち、退院準備期から在宅療養導入期、安定期の各期を通して看護過程を展開し、看護実践を行う。 本実習では、CNSが備えるべき6つの能力のうち、「卓越した実践能力」と「連携調整」、「倫理的問題の調整」を中心に、「教育」や「相談」の機能、「研究」的視座を持って看護実践を評価するための方法について学習する。
		在宅看護学実習Ⅲ (専門看護師の機能と役割②)	ここでは、前期に修了した在宅看護学実習Ⅰ・Ⅱで学んだ内容を生かし、終末期ケアに関する看護(緩和ケアを含む)を必要とする在宅療養者とその家族を受持ち、在宅看護過程の質をさらに深めて実践する。 また、CNSの共通目的の「実践」「教育」「相談」「連携調整」「倫理的問題の調整」「研究」の内容を実地の事業、他機関・他職種との連携等、具体的な実習内容に落とし込んで看護の質を高めていく。
		在宅看護学実習Ⅳ (訪問看護ステーション等の開設、管理・運営)	訪問看護ステーションの開設、管理・運営の実際を訪問看護ステーションの管理者について実習する。また、訪問看護実践の質改善のための職場環境の整備やスタッフの教育等に関する研究的取り組みについて実習する。本実習では、CNSの共通目的の「高度実践」「教育」「相談」「連携・調整」「倫理的問題の調整」「研究」の全てを統合する実習内容となる。 訪問看護ステーションの訪問看護活動から発生した「暮らしの保健室」含む関連施設における地域ケアネットワークシステムの構築について学修する。
研究科目		課題研究	専門看護師は、現場の看護を改善するチェンジエージェントとしての役割が期待されている。専門看護師として、現場での看護を改善し根拠に基づくケアを実践するために、研究を活用する能力、研究を計画し、実施する能力が必要不可欠である。 本科目は、共通科目や専門科目の学修を統合し、実践経験と文献クリティークを通して自己の研究課題を明確にし、研究計画書を作成し、修士論文(課題研究)を作成することを目標としている。本科目を通して、専門看護師の役割の一つである研究に必要な基礎的な能力を学修する。